

19世紀中葉のアムール川下流域およびサハリン周辺の 先住民族交易に関するロシア民族学者の記録

邦訳：レオポルド・フォン・シュレンク『アムール地方の異民族たち』
10章 交易 ギリヤーク

Records of Russian Ethnographers on Indigenous Trade in the Lower Amur
River Basin and Sakhalin in the Mid-19th Century:

Japanese Translation of Leopold von Shrenk, "Ob inorodtsakh Amurskogo kraya."
Chapter 10 Trade, Gilyak

監修・解題 Supervision and the Review

佐々木史郎 (SASAKI Shiro, Prof. Dr.)

国立アイヌ民族博物館 館長 (Executive Director, National Ainu Museum)

翻訳 Translation

是澤櫻子 (KORESAWA Sakurako)

国立アイヌ民族博物館 研究員 (Research & Curatorial Fellow, National Ainu Museum)

鈴木建治 (SUZUKI Kenji, Dr.)

国立アイヌ民族博物館 室長補佐 (Senior Fellow/Assistant Manager, National Ainu Museum)

キーワード：サンタン交易、先住民族、シュレンク、アムール、サハリン、ニヴフ、アイヌ、19世紀

Keywords: Santan trade, indigenous peoples, shrenk, Amur, Sakhalin, Nivkh, Ainu, 19th Century

1. 解題

佐々木史郎

レオポルド・フォン・シュレンク（ロシア風にはレオポルド・イヴァノヴィチ・シュレンク、1826–1894）はロシアの人類学者（民族学者）、動物学者である。彼を著名にしたのは、1853年から57年にかけて実施した極東地域の総合学術調査で、その中で1854年から56年にかけてアムール川流域とサハリン（樺太）で集中的な調査を行った。その成果は、自然科学も含む調査全体を網羅した書籍がドイツ語で刊行され、民族学の部分がロシア語でも刊行された（Schrenck 1858-1900; Шренк 1883-1903）。動物学者として、彼の名前はいくつかの動物種（魚、ヘビ、昆虫など）の学名に含まれているが、ドイツ語とロシア語で刊行された民族学の報告書はこの地域の古典的な民族誌とされている。

意外と知られていないが、彼は言語学、文化人類学（民族学）、自然人類学の言語的、文化的、形質的分類概念として知られる「パレオアジア」（シュレンクは「パレアジアート」paläasiaten / палеазиаты という、

日本語では「古アジア」ともいう）という概念を初めて提唱した人物である。この概念は、彼がアムール・サハリン地域の民族誌をまとめるにあたって、シベリア各地や北米までも視野に入れた言語学的、文化人類学的、自然人類学的な比較検討を行った結果導き出されたもので、そこには歴史的な視野も加味されていて、シベリア、北東アジアに比較的古い時代から住んできた人類の子孫という意味が含まれている（Шренк 1883: 257）。ちなみに、ここに訳出した部分に登場する民族では、ギリヤーク（ニヴフ）とアイヌが「パレアジアート」に分類されている。

また彼は、1714年にピョートル1世が創建し「クンストカーメラ」の名前で知られたロシア最古の博物館が、動物学部門、植物学部門、地質学部門などを切り離して、帝室アカデミーの人類学民族学博物館に改組されたときに初代館長（1879–1894）となっている。その博物館は現在のロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館である。

彼がアムール川流域やサハリンを調査した1854年から56年は、日本では安政元年から3年にあたり、ペ

リーの浦賀への来航(黒船来航)、プチャーチンの長崎来航により、開港、ヨーロッパ諸国との条約締結といった幕末の激動が始まった時代と重なっていた。特にサハリンではロシアの急激な進出(侵略)と条約締結交渉のために、幕府は松前藩に北方対策を任せるのをやめ、北海道、サハリン、千島列島からなる「蝦夷地」の再直轄地化を決断した。そして、箱館奉行所(現函館市内)を中心とした統治体制を再構築し、サハリンでの日本側の拠点だった白主会所に役人を常駐させ、「北蝦夷地」(サハリン)から大陸にかけての情勢に関する情報を積極的に集めた。箱館奉行所に集められていた記録の多くは、現在東京大学史料編纂所や北海道立図書館、函館市中央図書館などに収蔵されている。それらは1850年代から60年代のサハリンやアムール川下流域の情勢を知る恰好の史料であるが、シュレンクの調査はちょうど同じ時代だった。彼の民族誌を幕末史料と比較することで、当時のこの地域の諸民族の状況を多角的な視点から分析できるわけである。

シュレンク自身も触れているが(Шренк 1883: 1)、彼が調査した頃には、アムール川流域やサハリンにはヨーロッパ文化の影響は極めて小さかった。外からの影響があっても中国、日本、満洲といった周辺の「文化的」民族の影響だとシュレンクは考えていた。事実、まだこの地域では近代国家による帝国主義的植民地建設が始まっておらず、彼の民族誌では住民の言語や文化に近代国家の同化政策の影響はほとんど見られない。しかし彼が記録したことが、外からの影響を一切受けていない「自然状態」の文化だったということではない。現代の視点から見れば、彼が観察したのは清、江戸幕府といった前近代的国家が放つかなり強力な政治経済的な影響の下で成り立っていた社会や文化だった。したがって、シュレンクの民族誌は当時の清の辺民政策や江戸幕府の北方政策の文脈に置いて見直す必要がある。

本稿で訳出した「第10章 交易」は、まさに当時幕府の役人たちが管理していた「サンタン交易」である。幕府側が白主で行われていた日本とサンタン商人(現在のニヴフやウリチの祖先たち)の取引の現場に立ち会っていたのに対して、シュレンクは「アムール・ギリヤーク」(アムールのニヴフ)を中心とした地元住民間の交易を見聞していた。すなわち同じサンタン交易を異なる立ち位置、異なる視点から見ていたわけで、これは歴史研究にとってとても都合のよい状況である。すなわち、日本側の記録とシュレンクの民族誌

が相互補完的に実証し合う関係になるからである。筆者は日本側とシュレンクのデータを使って、サンタン交易を地元住民(ニヴフやウリチの祖先)の政治経済的な側面から分析したことがある(佐々木1998; 2011; Sasaki 2023)。しかし、従来の日本側のサンタン交易の研究で、このシュレンクの民族誌が活用されることは皆無ではないが稀で、また、ロシア、ヨーロッパ側ではアムール・サハリン地域の人類学的研究に、日本や中国側の記録が使われることはまずなかった。つまり、従来の歴史学、人類学の研究では、この相互実証性を活用できていなかったわけである。

今回、「交易」を扱った章の一部分(ニヴフに関する部分)ではあるが、シュレンクの民族誌をロシア語から日本語に翻訳したことで、日本におけるサハリンアムール川下流域に関する歴史研究や先住民族研究に活用の道が開かれた。実は、ドイツ語版の民族誌(第3巻第1～3綴)は日本語翻訳の試みがあった。例えば、クマの霊送りの儀礼を扱った第13章はすでに刊行されている(歳原1999)。また、第2章以外の他の章も函館高等工業専門学校の奥村博司教授によって翻訳されている。しかし、これはまだ刊行されていない。ロシア語版については、管見のかぎり日本語訳の試みはまだない。

今回の翻訳は国立アイヌ民族博物館の研究学芸職員の研修の一環として実施したロシア語講読の成果の一部である。筆者はその監修を行った。この民族誌はロシア語自体が難解な上に、19世紀中期の北東アジアに関する歴史学的、地理学的、人類学的知識をかなり持っていないと読解できない代物である。そのような難解な本の講読に挑戦し、実際に翻訳を行った是澤櫻子と鈴木建治には感謝申し上げたい。

今後この膨大な情報量を誇るシュレンクの著作(ロシア語版)の日本語訳を進めていく予定だが、それが将来のわが国における北東アジアの歴史研究や文化人類学的研究に少しでも寄与できれば幸いである。

文献

Schrenck, L. von

1858-1900 Reisen und Forschungen im Amur-Lande in den Jahren 1854-1856, Bd. 1-4, Sankt Petersburg: Commissionäre der K. Akademie der Wissenschaften.

Шренк, Л. И.

1883-1903 Об инородцах амурского края, том 1-3, СПб: Императорская академия наук.

佐々木史郎

1998 「18、19世紀におけるアムール川下流域住民の交易活動」『国立民族学博物館研究報告』22巻4号 pp.683-763

2011「サンタン交易の経済学」菊池俊彦編『北東アジアの歴史と文化』pp.515-536、北海道大学出版会

Sasaki, Shiro

2023 Economics of the Santan Trade: Profit of the Nivkh and Ul'chi traders in Northeast Asia in the 18th and 19th centuries. Ziker, J. P., J. Ferguson, and V. Davidov (eds.) The Siberian World, pp.531-548. London and New York: Routledge.
<http://doi.org/10.4324/9780429354663-44>

歳原佳代子 訳

1999 「熊送り」、北構保男編『アイヌ民族関連研究論文翻訳集』北地文化研究会

2. 邦訳：レオポルド・フォン・シュレンク『アムール地方の異民族たち』「10章 交易」のうちギリヤークに関する記述

監修 佐々木史郎

翻訳 是澤櫻子、鈴木建治

《凡例》

- ・本稿の原文は『Об инородцах Амурского края』（アムール地方の異民族について）に所収されている「Глава 10. Торговля」（10章 交易）のうち、ギリヤークに関して記述した276頁から298頁である。
- ・原文は書き流しであるため、訳文では小見出しをつけた。小見出しの内容は訳者の判断でつけたものであり、原文と区別するために【】を用いている。
- ・民族名はシュレンクが記したロシア語原文のまま、それを単数・男性形でカタカナ表記とした。現在の公称名称では、ギリヤーク（Гиляк）はニヴフ、ゴリド（Гольд）はナーナイ、オリチャ（Ольча）はウリチ、オロク（Орок）はウイルタ、ツングース（Тунгус）はエヴェンキとなっている。その他、ネギダール（Негидаль）、アイヌ（Айну）、サマギール（Самагир）とした（公的にはサマギールは現在ナーナイの一分派とされている）。
- ・動物名、地名はカタカナ表記をとった。原則としてシュレンクが記した通りの名前を用いたが、一部書き間違いと思われる箇所については訳注等にて補足を付した。読者の便宜のため、原文に基づいて主要な地名を記した地図を作成し、これに付した（図1）。
- ・本文中は中国商人と満洲商人がしばしば混同される箇所があるが、シュレンクの記したとおりに翻訳した。
- ・原文で固有名詞として《》で示されたものは、訳出の際に＜＞を付した。
- ・注について、シュレンク自身が記したものは本文中に丸括弧で挿入し、訳者によるものは角括弧（〔 〕）

で挿入、あるいは訳注としてまとめた。

- ・人名か地名かの識別をしづらいたと訳者が判断したもののみ初出に限り、本文中で〔地名〕あるいは〔人物〕とした。

第10章 交易

交易。経済活動等で得られた主要な交易品の価格。アムールの異民族¹⁾間および満洲中国人、和人²⁾、そしてロシア人との交易関係。近年のアムール川下流域における満洲中国支配下の交易の歴史的展望。

【交易の民 ギリヤーク】

アムールの異民族の生活において漁撈や狩猟は重要な意義を持っているにもかかわらず、それらだけでは彼らの需要を満たしていない。これら異民族が日常で使うもののうち、かなりの部分である食料、衣服、そして彼らにとって必要不可欠になった嗜好品などは、漁撈や狩猟によって得た獲物の一部を近隣の文化的民族に譲渡することによって入手されている。すなわち、交易によってである。交易とともに第三の生業がひらかれる。それは前者二つ〔漁撈と狩猟〕を補完するもので、その二つの意味は、交易との関係によってはじめて明らかになる。

ギリヤークを取り巻く物事の状態を考えると、これまでの章よりも本章でこそ、ギリヤークから説明をはじめなくてはならない。アムール川下流域のすべての異民族において、ギリヤークが最も商売っ気が強く、大きな規模で交易をしている。ロシア人によるギリヤークについての情報は、ヴィチム〔地名〕・ツングースの聞き取りを基本にしたものである。それは、1639年と1640年に、コサックのアタマン〔頭領〕であるペルフィリエフにより伝えられている。それによると、ギリヤークは、アムール（シルカ）川下流域に住んでおり、中国人と交易関係を結んでいる。ギリヤークは、実際に他のアムール川下流域の異民族よりも和人や中国人から離れて住んでいるにもかかわらず、彼らと最も積極的に交易をおこなっている。その上、彼らは、土着民³⁾と2つの文化的民族の間の仲介者として働いているだけでなく、2つの文化的民族の相互関係を構築する仲介者としての役割を担っている。このように、ギリヤークはある程度までアムール川下流域における全民族間の交易の中心とみなすことができる。これは、アムール・ギリヤークだけにあてはまること

である。サハリンとオホーツク海南岸に住んでいるギリヤークは、このような交易関係において、おそらく、アムール地域よりも周縁的な位置づけにあらう。アムール・ギリヤークは、まさにこの点に関し自身の地理的な位置づけにおいて、より好都合な条件下にいる。彼らはリマン経由のサハリン西海岸沿いの日本への海上ルート以外に、もう一つアムールへのルートを持っており、それはアムールやさらに上流のスنگリ[現在の中国・松花江]に住む中国人へと彼らを導くものである。そして、ギリヤーク ―再びアムール・ギリヤークのことだが― は、ロシア人との交易においても、近隣の諸民族と比べてかなり中心的で仲介的な位置づけを占めている。これは1850年代にロシアがアムールの河口から占領をはじめたからである。最初のロシア人の移入者たちは、ギリヤークの世界で生活をはじめた。そこにはニコラエフスク哨所も含まれており、長い間、ロシアの地方行政局が置かれ、ここから先に位置するアムール川下流域やサハリンなどにさらなる占領地が広がっていた。

【ロシア人との関係】

奇妙なことに、ロシア人によるこの地域の占領は、最初は少数であったにもかかわらず、平和的な方法で血にまみれた争いなしに行われた。17世紀にロシア人の略奪集団の襲来に直面したギリヤークの強い反発を考慮にいと、これはさらに驚くべきことのように思われるかもしれない。加えて、これらの異民族[ギリヤーク]は、少しもツングースのように温厚だったり、人の言いなりになったり、呑気ではない。それどころか、彼らはかなり狡猾、強情、貪欲で、無礼をはたらいた場合、血まみれの行為をためらわない(なお、この証拠はデ・ラ・ブリュニエールの殺害である(78頁の注を参照)。私がアムールに到着する少し前に、サハリンの北西端の海岸に打ち上げられた捕鯨船の乗組員が殴打され、その上、船自体が略奪された。この壊滅的侵略(ボグロム)の英雄は、タムリャ・ヴォ村のギリヤークで、特に評判の悪い村だった。1855年にボゴビ村で私が見た数字と英語の銘が書かれている桶もおそらくこの船からのものである[原文277頁 註1])。もちろん、この場合、事を平和的に変えるには、ギリヤークにそなわっている高い商業精神に訴えるのが最も作用する。その後、彼らはロシア人の居住地において、魚、肉、ベリーなどその時まで彼らの手元に残っていたさまざまな品物の余剰分を販売し、タバコ、衣

類の生地、その他の価値のある品物と交換することができた。これにより、彼らは来訪者に対して平和的になった。彼らがその活発さ、機知、要領の良さによって自分たちのために得た利益は、人口も力も増大しているにもかかわらず、そのような外国人⁴⁾に対する不信感や恐れをかき消した。ニコラエフスク哨所はすぐにアムール・ギリヤークとロシア人の貿易の中心となった。そして、アムール・ギリヤークと、オホーツク海とサハリンの同族、アイヌ、そしてアムールのツングースとの活発な交流により、ロシアの商品のいくつかは急速に地域全体に広がりつつある。それに対して、サハリンでは現在廃止されているムラヴィエフ哨所を除いて、私の時代には他のロシア人の移住者がいなかったもので、ギリヤークはロシア人に対して疑い深く、敵対的だった。旅行者は、予期しない攻撃を受けないように常に警戒していなければならなかった。ユルタ[天幕]のなかで燃えさかる炉の周りに座りながら、彼らがロシア人の来訪についてどのように考えているかを何回か聞いたことがある。私が理解していないと確信していた彼らは、私のように彼らの国土を研究している招かれざる客が、最後に彼らを追い出し、彼らを亡ぼすのではないかという不満と恐れを大声で表明した。ティック、ドゥイ、ティミ川の上流にある村など他の場所では、彼らは公然と敵意を露わにした。私が休息所を使うのを拒否し、彼らの火で料理することを許さず、イヌのエサを売りがらなかった。最新の事例では、彼らは脅迫するような拳銃の前でも屈しなかった。しかし、私はギリヤークの交易への情熱に毎回救われた。私はいつも物々交換のためにさまざまな品物を持ち、まるで意図せずに、それらのいずれかを見せた。1人が誘惑に屈すると、他の人は彼に従い、先を争って私に必要なものを提供してくれた。するとその後は、他のすべての事項について容易に合意に達した。ギリヤークは、交易において多くの実用的な理解力、用心さ、忍耐力、巧妙さを示した。彼らは一般的に、実際の使用方法を知っているものだけを手に入れる傾向がある。新しく、珍しく、いかに目立ち印象的なもの(加えて、彼らは承認の証として手のひらで頭を叩き、ツァ・ツァ・エと叫ぶ)でも、決して購入することはなく、贈与としてのみ受け付ける。彼ら自身、交易取引の開始時に粗悪な製品を提供しそれを賞賛することを止めず、一度設定された価格を引き下げることなく、徐々に良い製品に変えていく。一言で言えば、彼らのこのやり方にこそ交易に対し習慣化

し、成熟した民族性が現れる。だからこそ我々は彼らの交易活動の今後をみていく必要がある。

【価格の共通単位—「ヤ」について】

アムールの異民族の交易は、例外なく物々交換であり、それはギリヤークも同様である。アムールの異民族は、貨幣を全く流通させていない。それにもかかわらず、交易的・経済的な生産物に対して、相対的だけでなく、絶対的な価値も機能していた。その価値づけは、決められた数字によって表される。アムールの異民族における共有された評価単位の存在は、品物の価格決定を行い、そして単位の数値的な違いによって品物の価値づけと標準化がなされる。[評価の]単位とは何か、それは何によって表現されているのか。私にとって、ここに到達することは容易ではなかった。例外なく物と物とを交換をしながら、ギリヤークは双方の品物に価格を付けるという問題において、手に入れた商品量を一定にするという形で評価している（例えば、煙草3箱、布地2サージェンなど）。物々交換の基礎をなす品物の絶対的価値についての疑問は、よほど聡明な人を除いて、土着民の頭にはほとんど浮ばない。しかし、その場合の回答は、単なる数字に限られている。その数字は、どのような価格を示す単位もつけずに、「価する」という動詞（ギリヤーク語で「チャルハチ」）の前におかれる。さらに、彼らはいつも生物を数えるときに用いられる数字の形を使う。これはどのような根拠に基づいているのかについては、私にはわからない。物の価値に関する前述のような考え方式に対する明瞭な疑問点について、ギリヤークは次のように答える：すなわち、「ニユン」、「モル」、「チョル」（これは生きていないものを数える数詞「ニヤクル」、「ミヤクル」、「チャクル」の形ではない[原文279頁 註1]）など、「チャルハチ」あるいは一動詞「存在する」に接尾語「ラ」を追加して—チャルハラ（「カクク」が「～がない」を意味することに依拠して、「カククラ」は「存在しない」を意味する：あるいは「ンガルズコチ」は「悪い」、「ンガルズコラ」は「不快」を意味する[原文279頁 註2]）、すなわち、物が1、2、3の価値があるということである。これを暗示している評価単位は言われないものであり、それ自体が明白なものであり、より正確に語る必要がないかのようなものである。この点を念頭に置いて、私はすべての品物に関する価格表をつくることに以前から成功した。それはギリヤークの交易、経済、生活という、多かれ少なかれ目に見え

る場を支配しているものである。しかし私は、品物の価値を決めるための数字につけるべき単位について完全なる無知の中にいた。私は、はじめにオリチャのところでこの勘定を見抜いた。それは、自身の母語のみならず、ギリヤーク語を巧みに操っているオリチャの道案内人のもとで見つけることができたおかげであった。しかしギリヤークやすべてのアムール川下流域の異民族たちの評価単位について最終的に知ったのは、しばらくしてゴリドと親しくなってからだった。ホシ・アムボ〔人物〕—このように呼ばれている私の道案内人（オリチャの土地のウダ村出身で、彼はギリヤーク語の知識を有している。主にそれはテバフ出身のギリヤークの女性を妻に迎えたことによるものである[原文279頁 註3]）—は、ギリヤークのように品物の価格を正確に決めているが、唯一の違いは対応する数字のあとに動詞「サレ」をつけていることである（すなわちギリヤーク語「チャルハチ」で「価する」という意味である）。これにより、彼は時折「オム（1つ）サレ」の代わりに、「オム ヤン サレ」などと言う。明らかな韻の種類である文字「ン」を除いてしまって、私は、オリチャやギリヤークにおける品物の価格の基礎になる単位が「ヤ」と呼ばれているという結論に達した。これは、おそらく中国語起源による評価の値であろう。私が既に話した推測は、すぐにゴリドのところで証明された。ゴリドには「ヤ」と言う単語があり、すでに評価額の単位だけを意味するものではなくなっていた。むしろどのようなときも、対応する数字のあとに発音される。私がゴリドから知った事実は、中国人は「ヤ」を10分割し、それらをゴリドは「ディハ」と呼ぶこと。1ディハは100枚の中国銅貨（ゴリド語では「ツィリクタ〔銅の〕・ディハ」と呼ぶ）に分割され、[中国銅貨]1000枚は1ヤに相当すること。中国の銀1両分（リャンまたはテール）は、すなわち、ロシアの銀貨2ルーブルに相当することである。アムール川下流域の交易における中国人の主導的な役割は、彼ら中国人の評価額の単位が商品や資産の価格設定において地元の異民族にとって共通の基礎として機能するという事実が証明している。スングリのゴリドは、中国人の最も近くに住んでおり、活発で細かい取引を行っている。彼らは、銀1両の10分の1、場合によっては100分の1、あるいは1ヤを考慮せざるを得ない。そのため、必然的に彼らの商品の価格に応じて評価額の単位を（ヤかディハで）指定する必要がある。反対に、中国から遠く離れた異民族、オリチャやギリヤークは、我々が見

るように彼らが必要とする中国の商品を主にスングリのサン・シン〔地名〕〔三姓〕から卸売で受取っており、「ヤ」の10分の1や100分の1は、彼らにとって何の実際の意味も持たない。彼らは分割しない単位と倍数の単位のみを所有する。したがって、常に名前をつける必要はなく、対応する数値にのみ限定できる。もし私がギリヤークではなくゴリドを対象にこの問題に関する調査をはじめていたら、彼らの商品の値付けの基礎にある評価額の単位をすぐに理解しただろう。とはいえ、中国人から借用した単位は、硬貨で表されるものではなく、アムールの異民族にとってはもっぱら漠然としたままである。その大きさについては、あれこれの商品の量や数について概算的な理解しかない。この中央に四角形の穴が空いた銅の丸いものは、何十、何千と紐に通されている（ギリヤーク語でチハと呼ぶ）。これ自体価値が低いため、これらのコインはギリヤークの尊敬を全く集めておらず、さまざまな形状の他の銅板と一緒に、女性の衣服の装飾、またはシャツやベルトのボタンとして使用されている。私がいたときのロシアの硬貨は、ギリヤークは同様にチハと呼んでおり（つまりもっぱら〈硬貨〉を意味する）、ギリヤークの間でも、他のアムール川下流域の異民族の間でも流通していなかった。そして、その価値は全く知られていなかった。中国商人が自分達の側でその受入れを拒否したからだ（硬貨の呼称のうち、私のアムール滞在中は、スペイン語（メキシコ）のピアストル、中国人はいわゆるコロンナドスのみを受け入れた。しかし、この硬貨は事前に手持ち式のはかりに掛けられていた〔原文280頁 註1〕）。しかしそれ以来、ギリヤークはロシア人との絶え間ない関係のおかげで、すでにロシア貨幣を使うことに完全に慣れてきた（現在、彼らは商品の支払いとしてあらゆる種類のロシアのお金を喜んで受け入れている—硬貨だけでなく紙幣も。彼らの機転と機知に富んだ商売の証として、私がアムールに滞在していた頃の次の出来事を挙げることができる。すでに何度も言及したように、ロシア人によるこの地域の占領初期からロシア人と密接な関係にあった私のクリ出身のギリヤークのボズヴェイン〔人物〕は、同胞たちのもとで金銀の存在を知り、同胞から銀貨や金貨を含めた様々な価値のあるものを引き出そうと計画してニコラエフスクからサハリンへ小さな商品を持って行った。これらの貴重品は、アメリカの捕鯨船の乗組員をほぼ完全に殴打した強盗により、サハリンのギリヤークにわたった。サハリンでの事業を成功裏に終

わらせた後、ボズヴェインはニコラエフスクに戻り、持ってきたものをロシア人に転売して大きな利益を得た〔原文280頁 註2〕）。

アムール川下流域の異民族の間に中国人に由来する同じ評価額の単位が存在することは、異民族相互間の取引だけでなく、対中国人の相互取引においても確立された規範があることを伝えている。物々交換では様々な多くの商品が扱われているにも関わらず、質量ともに等価とみなされるのは同じ評価額の単位が維持されている場合であり、したがって、物々交換は買い手と売り手の両方に損害を与えることなく行うことができる。一方で、多かれ少なかれ中国人の需要と、他方で、ギリヤーク、オリチャ、ゴリドの需要の程度は、交易品の価格に関する尺度として機能する。そして、後者の需要は、これらの品物が和人と異民族のさらなる取引取引高に適するかどうかによって制約される。しかし、中国人によるアムール地域の取引において、排他的に優勢であったときの品物の価格は、ギリヤーク、そして彼らの後に続く他のアムールの異民族が中国人にとって危険な競争相手となったロシア人と接触した後、大きく変えねばならなかった。その結果、アムール川下流域の取引の様相についての私の観察は、異民族とロシア人が接近する初期に関してであり、その結果は今ほどはっきりとしていなかったということを経験にもまして受け入れなければならないであろう。取引の対象にはならないが、日々の生活に必要なもので構成されているギリヤークの品物の価格については、彼らの規範、認識、世界観によって規定されている。そのことについて、我々は遅かれ早かれ証明するだろう。

【ギリヤークの価値観】

根気のいる調査と私の個人的なギリヤークとの取引関係、その他の関係は、中国人、和人、ロシア人との取引による主要な品物や、それと同様に彼らの様々な生活必需品の価格表を手に入れる可能性を私に与えた。これらの品物の価格一覧をここで示す。

クロテンの毛皮、質次第 価格 1～3ヤ
アカギツネ（パズーンガ）の毛皮 価格 2ヤ
クロギツネ（ブラドゥフェ）の毛皮 価格 3ヤ
ギンギツネ（ヘドゥフェ）の毛皮、良質次第 価格 10ヤ以上
頭、両足、しっぽ付きのオオヤマネコの毛皮 価格

8～10ヤ

頭、両足、しっぽなしのオオヤマネコの毛皮 価格 5ヤ

カワウソの毛皮は1 指尺単位のサイズで評価される 価格 1ヤ

良質のアザラシ、ゴマファザラシ属⁵⁾(ピグヒ)とアゴヒゲアザラシ属⁶⁾(キーチ) 価格 1ヤ

一般的な木綿織物(ポシ) 4 サージェン(ギリヤーク自身は腕全体を伸ばして計測し、それはサージェンと同様である。また指あるいは指尺[18cm]によっても計測する[原文281頁 註1]) 価格 1ヤ

半ビロード(パルプレツ・ポシ) 2 サージェン 価格 1ヤ

羅紗(ドウジャングタ) 1.5 サージェン 価格 1ヤ
満洲製(おそらく中国製を指す。このような4 サージェンとは、1 本あるいは1 反となる[原文281頁 註2]) シルク(非常に不揃いな) 織物(チャルビ) 4 サージェン 価格 5ヤ

ギリヤークの衣服は、素材の価値や質に依存している：満洲製シルク織物を使った幅の広い袖の長い上着(ウハト)⁷⁾ 価格 5ヤ

満洲製シルク織物を使った女性用帽子(チャルプ・ハク) 価格 3ヤ

オオヤマネコの頭の毛皮を使った女性用帽子(チリィギ・ハク) 価格 2ヤ

上質のリスのしっぽを使った襟巻(トルビ) 価格 1ヤ

刺繍を多用した魚皮(チュルク)製の女性用衣服 価格 1ヤ

オオヤマネコの毛皮を使った外套(おおよそ6 枚の毛皮を使用) 価格 30ヤ

イヌの毛皮の価格は、まずは色で、次に毛皮の質とイヌの年齢で決められている。：以下、
灰黄褐色のイヌの毛皮(チャブル・オクハ) 価格 1ヤ

褐色の斑点が混じる白色のイヌの毛皮(アルハルハ・オクハ) 価格 1ヤ

白色のイヌの毛皮(チャング・オクハ) 価格 2ヤ

黒色あるいは暗褐色の成獣のイヌの毛皮(ウイル・オクハ) 価格 3ヤ

幼獣のイヌの毛皮 価格 2ヤ

ギリヤークの他の衣類：一般的な木綿のシャツ、羅紗製あるいは半ビロード製の半カフタン[足首までである上着]、アザラシの皮を使ったズボンと前掛(コシキ)、普通の冬用帽子、白樺樹皮製の夏用帽子、手甲、耳当て、手袋など。特に最後の3 点は通常刺繍が施されているにもかかわらず、1 ヤ以下となる。続いて：

小麦1 袋 価格 2ヤ

脱穀したキビ(満洲製(非常に長細い)) 4 袋はクロテン4 匹と同等で、つまり約6 ヤである 価格 4～8ヤ

ウォッカ1 箱(クイルムル・ヴァクケ) 価格 10ヤ

煙草の葉10束、収穫が乏しい時期は5 束 価格 1ヤ

大きなチョウザメ(トゥクキ・チョ) 価格 2ヤ
大きなダウリヤチョウザメ⁸⁾(パトフ・チョ) 価格 4～5ヤ

生きた仔グマ 価格 25ヤ

生きた成獣のクマ、大きさ次第 価格 30～40ヤ

中型・中品質のイヌ 価格 1ヤ

普通の橇 価格 1ヤ

ヘラジカの毛皮を張ったツングースのスキー1 セット(ギリヤーク語でルドゥヒ・エン、すなわちサマギールのスキーの意) 価格 1ヤ

アザラシの毛皮を張った地元民[ギリヤーク]のスキー1 セットは1 ヤ以下である。

小型・中型の舟、大きさ次第 価格 3～7ヤ

大型で新しい舟 価格 13ヤ

魚皮製の帆 価格 1ヤ

魚網10 サージェン毎 価格 1ヤ

クジラのひげ製の小札を敷き詰めた弓 価格 1ヤ
銀製の取っ手付の水牛あるいはサイの骨製小札を敷き詰めた弓(ングイヒフ・ブンチ)、銀製取っ手の数次第 価格 8～10ヤ

単銃身の猟銃 価格 2ヤ

ロシアシベリア式のライフル 価格 4ヤ

双銃身の猟銃 価格 6ヤ

銀製装飾がない長さ1 ローコチ[ひじの長さ]の槍 価格 1ヤ

銀製象嵌細工を施した長さ1 ローコチの槍 価格 3ヤ

銀製装飾が施されていない、肩から指先までの腕の長さの槍先 価格 3ヤ

銀製装飾が施されている、肩から指先までの腕の長さの槍先、銀細工の数次第、価格 8～10ヤ

満洲製の斧 価格 1ヤ

古い満洲製の鎧(ヴィチ・ペチ)⁹⁾ 価格 30ヤ

地元民がつくった古い紐製の鎧(ケ・ペチ) 価格 3～4ヤ

カマド用や携帯用の鍋の値段は、部分的には容量で確定されるが、主にその製作元で決められる。満洲製(中国製)の鍋は、日本製よりも劣ると考えられている。前者は空焚きすると直ぐにひびが入り、後者はそれがない。そして：

カマド用の大型の満洲製鍋(オルモチ・ヴン) 価格 4ヤ

小型の満洲製鍋 価格 3ヤ

吊耳が付いた携帯用の満洲製鍋(マチ・ヴン)、容量次第 価格 3～7ヤ

小型の日本製鍋(ギリヤーク語でクギ・ヴン、すなわちアイヌの鍋の意) 価格 7～8ヤ

大型の日本製鍋 価格 20ヤ

3つの吊耳あるいは取っ手が付いた大型の日本製鍋 価格 30ヤ

ギリヤークの住居に対する評価は、非常に独特である。

2つのカマドが付く冬用ユルタ(チャドゥルイファ) 価格 4ヤ

夏用ユルタ(ケルイファ) 価格 2～4ヤ

倉(ニヨ)、敷居の数次第 価格 10ヤ以上

【ギリヤークの交易の主な特徴】

この表はギリヤークの交易の認識についての定義を我々に示している。表に記載された数字によると、彼らの性格や習慣について十分正確な結論を出すことが出来る。しかし、これについての結論はまだ先である。まずは、以下の一般的な結論について考えてみよう。

1) ギリヤークと中国人の主な交易品は、私たちがすでにみてきたように、毛皮製品である。毛皮の価格は比較的低く、これはアムール川下流域に疑いもなく動物が豊富に生息しているためであり、いままで枯渇したことはない。全ての毛皮の中でも、ここで特に価値があるのは、ギンギツネとオオヤマネコのたった2

種類の毛皮である。最初の毛皮は、その確かな美しさと希少性ゆえ、中国人の間で高く評価される。オオヤマネコの毛皮については、ギリヤークが思い描く価値の高さが交易での拡大を妨げている。

2) しかし、実際の価値とはあまり一致しない高値ゆえに、オオヤマネコの毛皮以外にも私たちに驚かせるいくつかの他の交易品がまだある。例えば、古代満洲の鎖帷子(くさりかたびら)や兜、吊り耳あるいは取っ手が3つある日本の鍋などである。残念ながら鍋は見たことがない。しかし、それほど大きな価格の差を正当化するほど、2つの耳やその他の形状のわずかな変化を備えた同じ日本製の鍋をこれらが凌駕するかは疑わしい。ここには、率直にかくも他の全てに実用的であるギリヤークの財産に関する卓越性と敬意に対する強い嗜好が示される。

3) 同じ虚栄心ゆえ、ギリヤークは生きているクマを高く評価する。生きているクマを獲ることは、利益にならないだけでなく損になる。[ギリヤークが]生きているクマを殺し、その肉を荘厳な盛り付けでごちそうすることは、常に大金を使い果たすことに関連する。しかし一方で、これによって裕福で尊敬に値する人として高い評判を得ることができる。

4) 主に中国人と品物を交換して得る生地の中なかでも、ギリヤークは何よりも金や銀、または龍やその他の中国の模様が織り込まれた様々な色の絹織物を高く評価する。とはいえ、女性の盛装用の帽子を除いて、彼ら自身は絹織物をあまり使用しない。そして明らかに絹織物を評価するのは、彼らがそれらの布を特に気に入る、彼らの好みや豊かさに満足にあたえるからというよりむしろ、和人との交易の商品として機能するためである。これはギリヤークが商業精神と交易事業において機知に富んでいることの最良の証拠である。

5) ギリヤークと中国人の物々交換においてウォッカ(アラキ)の価格が高いことも同様の説明ができる。ギリヤーク自身がウォッカに貪欲で、それゆえに搾取される関係に容易に陥ると考えるのは間違いである。もし死ぬほど飲むとしたら、私にとっても同じ量である。しかし、儲けに関するすべてのものに極めて敏感な彼らは、概して生産地から遠く離れた他の異民族のお気に入りの飲み物への強い嗜好を利用することができた。このように、ウォッカもギリヤークの商業精神を刺激するものの一つである。我々はすでにロシアの水兵やコサックとの物々交換においてさえ、ウォッカの助けによりギリヤークが自分達のために利益を引

き出してきた姿を見てきた。

6) 生業の道具、衣服の様々な部分や生活用具に関するその他の製品において、装飾がどんなに繊細であろうと、またどんなに装飾されようと、それらは自製品のひとつでしかない。それらはいつもギリヤークにとってとても価値が低いものである。それらは中国製品が入っている場合のみ、価値が上がるだろう。例えば、水牛の角製の小札をはり合わせた弓、あるいは銀製装飾を施した槍等がこれに当たる。つまり、これらの製品の価値について、ギリヤークは、細工の巧みさや彼らの費やされている労働力や時間の位置づけではなく、お金が費やされる角製の小札や銀のみを考慮している。

7) 異なる種類の建築物に対するギリヤークの評価は、一見すると矛盾している。例えば、2つのかまど、大きな窓、下に暖房用の管を通した広い4つの床を持つ中国風の複雑で広々とした冬用住居が、最も手が込んでいないことで特徴的な倉庫の値段の半分の価値しかないということが信じ難い。少なくとも、ギリヤークが複数回私にそれを証明したので、私は前述した数値の信憑性について支持している。私は今後、家屋の建築時や使用時に現れる共同体的精神に貫かれたギリヤークの社会生活の記述について、ギリヤーク自身の証言に基づいて明らかにするほうがより良いと期待している。

8) 今、私のギリヤークの価格表とマクシモヴィッチによるゴリドのものとを比較しよう(彼から私に裁量を任された、彼の手稿記録を参照[原文285頁 註1])。価格表は、多くの場合それぞれ類似しており、それはスガリの中国市場で支配的な価値が両者の基準として機能しているためである。ただ、その他の細目において、地域やその住民を表している特徴的な違いだけがそこにみられる。例えば、柔らかい毛皮類は、総じてギリヤークよりもゴリドの方が高く評価している(ゴリドでは、上質のクロテンは4~5ヤ;アカギツネは3ヤ;ギンギツネは30ヤで、60ヤすることもある)。これは、おそらくゴリドの地域では毛皮獣がより北に位置する森林地帯よりも少ないからである。しかし、これは地域におけるすべての交易の熱心な仲介者としてのギリヤークが、この商品の大部分を手に行っていることについて幾分か考慮する必要があるかもしれない。ちなみに、ゴリドはリス、オコジョ、チョウセンイタチなどの小動物も嫌いではない(リスの毛皮10枚が1/2ヤ;リスの毛皮による外套が7ヤとなる)。

ギリヤークはといえば、毛皮についてはとても豊かであり、小物ほど軽んじる。しまいには、唯一毛皮獣の狩猟や交易に専念しているギリヤークとは反対に、ゴリドはシカ科の動物もまた熱心に狩猟し、その毛皮も中国人と交易している(ゴリドにおいて、シベリアノロジカの毛皮が1/2ヤ;鞣していないワピチの一種あるいはヘラジカの毛皮が1ヤで、鞣したものが2ヤである)。毛皮商品と同様、漁撈による主要な食品においても、ギリヤークよりもゴリドの方が高い価値を見出している(ゴリドでは、例えば大きなチョウザメは10ヤとなる)。これは第一に魚がアムール川上流域に行くに従い減少すること、第二にゴリドがギリヤークよりも漁撈に従事することが非常に少ないことからである。その代わり、穀物となる植物や野菜(さやのある様々な豆類)は、ゴリドではギリヤークよりもその価値が低く、その理由として、ゴリドは農耕が盛んな中国人に近いところに住んでおり、また彼らが部分的に野菜を栽培しているからである。ゴリドにおいて300束が20ヤするタバコ<細ひも>もまた、同様に明確に関係している(上記の価格表に従うと、ギリヤークでは30ヤする[原文286頁 註1])。ギリヤークが住む地にロシア人がやってきたことに伴い、中国製(満洲製)のタバコの価値が彼らの中で著しく低くなった。なぜなら、とてもきついロシア製(チェルカースキー製)のタバコは、彼らの嗜好に合っていたからである。

【毛皮交易】

したがって、アムールの異民族と中国人の交易の主な対象は動物の毛皮である。つまりクロテン、キツネ、カワウソの毛皮だ。しかし、これまで見てきたようにギリヤークは一般的に狩猟行為を好まず、商業精神に心を惹きつけられている。そしてこれは、もちろん狩猟を除き、その他に彼らの好みや傾向に反しない方法を探すことを彼らに奨励する。そのような方法とは、例えばツングースのような、より狩猟に積極的な他の民族との接近である。ギリヤークはあらかじめ彼らと関係を結び、彼らが狩猟した獲物の大部分を得る。しかし、中国人への毛皮商品の主な供給者であるアムール・ギリヤークは、その他にもオホーツク海岸やサハリン島にいる遠く離れた同胞からも毛皮を買い付けている。彼ら[アムール・ギリヤーク]でチョミ出身のギリヤークは、中国の商品をギリヤークのあらゆる土地の隅々まで、そして最も近い隣人であるネギダール、トナカイ牧畜民のツングース、オロクやアイヌま

でも運ぶ運搬者でもある。言うまでもなく、この交易の主要な利益も彼らのものになる。この地域全体で中国商人は一人もいない。アムール川下流域において、最北端と最東端では中国商人は周期的に現れ、多かれ少なかれ継続的に残っている。それはギリヤークとの境目付近のオリチャのプリ村である。冬には、この場所は前述のティミからガゼラフスキーにわたる道に沿って、チョミのギリヤークでも簡単に辿り着くことができる。中国商人は、人のいないアムールの左岸を利用して、プリ村からアムグン〔地名〕のネギダールのもとへ密かに向かうことがある。中国商人は、ギリヤークが多く住む右岸を慎重に避けている。ギリヤーク自身は、私に中国商人に自分達を訪問することを許可しないと言った。25年前、彼らのうちの一人が立ち寄った際、彼らはその人物でさえ殺したのだ。中国商人に対するギリヤークのこの敵意が何に基づいているかを判断するのは困難である。満洲中国人のくびきから身を守りたいという願望、または中国人を下にみたいという願望なのか。いずれにせよ、そのような行動パターンは交易関係において彼らに非常に有益である。アムール川を上ると、オリチャ、ゴリド、サマギールにとって、スナガリに定住した中国商人との交易における仲介者の役割は、その状況において中国商人と利害関係でぶつかる。ギリヤークとツングースの地域では、この役割はアムール・ギリヤークに属する。そして、彼らは自身に多大な利益をもたらしつつ、非常に上手くその役割を遂行する。狩猟の巧みさや機動性はツングースの隣人たちに負けるが、ギリヤークは、その代わり交易において最高度のこれらの特性を持っている。彼らは自宅でタバコ、ウォッカ、パン製品、織物、その他の中国製品、そして最近ではロシア製品を取引し、ネギダールやツングース、オホーツク海やリマン、サハリンの彼らに属する同胞からもたらされた動物の毛皮と交換する。加えて、彼らは前述の異民族の商品の在庫や、チョウザメやペルーガのような地元の生産物をもって、これらの異民族のもとへの旅を自身で行う。アムール・ギリヤークは、漁業における生産性が最も低い冬のような時期を、この旅のために使っている。彼らは犬橇で移動するが、アムールでとれる魚のおかげで大量の飼育が可能である。実際、このようにアムールのギリヤークは冬のほぼすべての間、交易を目的に各地を旅して過ごす。彼らの原始的な移動手段では多くの商品をすぐに運搬できない。しかし、旅は次から次へと頻繁に繰り返されるため、結

論として十分に大きな結果をもたらす。彼らの旅の主要な目的は常に同じで、中国人との交易用の獣の毛皮や毛皮製衣服の入手である。そして最終的に、この一様な目的はそうでなければ狩猟に費やされたであろう労働と時間を十分に埋め合わせるのである。したがって、ここでもこれらあるいは別の商品の生産者は、それを巧みに流通にのせることができる仲介人と比べて、得られる利益が常に少ないことが実証される。

【アムール・ギリヤークの交易ルート】

アムール・ギリヤークの交易ルートは主に3方向ある：ネギダールのもとへ向かうアムグン（ギリヤーク語でヒィンク）行きとサマギールのもとへ向かうウディリ湖行きの西ルート、同胞のもとへ行くオホーツク海行きの北ルートとサハリン島行きの東ルートである。ギリヤークとネギダールの関係はずっと古くから続いている。ちなみにネギダールは、オリチャの次にツングース系の他のすべてのアムール異民族よりも強くギリヤークと一体化している、あるいはギリヤーク化したといわれている。この点において、ネギダールはオリチャ同様、他のどの民族よりも交易を仲介する役割が高い傾向にあり、それは彼らの地域における地理的条件が、彼らにその方策を少なからず与えているからである。ネギダールは、既にアムグン川において、アムールにいる中国人商人に直通する道を持っている。そして冬の時期だけは、同じく中国商人が訪れているゴリンのサマギールと彼らを小さな氷原が隔てている。そしてアムグン川の北の支流の中で主要な支流であるネミレン川下流域のその背後に位置する最北限の境界付近に、ブルカンという場所があり、周辺のツングースや主にネギダール (Fr. シュミット, Histor. Bericht über die Sibir. Exp. der Russ. Geogr. Gesellsch. (Beitr. zur Kenntn. des Russ. Reiches, Bd. XXV. 134と150頁) を参照のこと [原文287頁 註1]) と交易するためにロシア人とヤクート人の商人が毎年12月にそこに集まっている¹⁰⁾。それゆえ交易の仲介者としてふるまっているギリヤークは、ネギダールの住む場所ではその成功は少ない。ただし、ギリヤークが住む地域の近くでオホーツク海沿岸南部からアムールにつながる道沿いにある人里離れた場所が例外として存在している。例えば、ギリヤークの村しかないオレリ湖やチリヤ湖の隅がこれにあたる。また、サマギールも同じく、いつもはゴリン（ギリヤーク語でキール）〔地名〕流域に住んでいるが、ギリヤークに隣りあった

小さい集落があった。例えばウディリ湖の辺りで、ネギダールの湖とも言えるが、そこにはアムール・ギリヤークが冬だけでなく夏も交易のために訪れていた。バト〔地名〕では私自身、メズクン〔地名〕のギリヤークのこのような交易にむけた集まりを目撃した。これは1856年5月18(30)日のことである。様々な中国製品を積んだ舟がウディリ湖のくルドフィ>(サマギール)へ向けて出航する準備を整えていた。しかしところで、ウディリ湖は地理的にも言語的にも、ギリヤークよりもオリチャに共通性を持っている。

【アムール、オホーツク、サハリンのギリヤークの関係性】

アムール・ギリヤークは交易の仲介者として、オホーツク海沿岸の同胞よりもはるかに適している。彼らの道は、パルヴォからクリへ、あるいはヴァエラからヒスカへ、そこへは直線的でしかも短い。アムール・ギリヤークは、中国製商品の、あるいはペトロフスク哨所の廃止時以降はロシア製商品の唯一の運搬者であり、それらの商品と引きかえで毛皮を得ていた。オホーツク・ギリヤークは一部、オホーツク海沿岸やシャントールスキー諸島で狩猟を行い、また一方で幾分かにはトゥグル〔地名〕やメヴァチャンスキー山脈からきたツングースの狩猟者のところで毛皮製品を買い占める。そして彼らは、漁撈やアザラシ漁で得た品物、そして同様に、アムール・ギリヤークのところで手に入れた様々な品物を売りさばいている。最近では、オホーツク・ギリヤークは、この他にもアムール・ギリヤークが第一に和人に転売するワシ羽も売っている。また、アムール・ギリヤークは、オホーツク海沿岸でアザラシの毛皮と油を自分たちで使用するため、または南に住む隣人のオリチャやゴリドとの今後の交易のために安く買っている。

しかし、アムール・ギリヤークとチョミのギリヤークは、中国人との交易用の主要な動物の毛皮の在庫をサハリンで得ている。ひとつはリマンとトロの島の海岸の北へ行き、2つめは西にボゴビから南に向かってティミの上流に沿う。とはいえ、ここではどちらも自身の活動範囲として選択した場所の厳密な境界については執着しない。奇妙なことに、サハリン・ギリヤークはアムールの同胞ほどあまり遠くへ移動しない。彼ら自身はめったに大陸を訪れることはなく、交易のために長旅をすることはない。彼らは最も近い隣人であるオロクとアイヌから動物の毛皮を得ることに限定し、それらをウォッカやタバコ、その他の中国製品の

ようなここでも高く評価される品々と交換する。先に述べたように、彼ら自身は後者を直接受け取るのではなく、すべてアムール・ギリヤークを介して得る。オロクも同様に、中国商人との個人的な取引のためだけにティミとガゼラフスキーをつきぬけてプリへ訪れることは稀である。アイヌは彼らの島を離れることは決してなかった。このように、サハリンにおける中国製品の交易は、大陸のギリヤークに集中することによって、彼らに大きな利益がもたらされる。我々が既に見てきたように、島は特に最も需要がある毛皮をもつ種類の動物が豊富に生息している。サハリンに住む三つの民族は、すべて等しく狩猟に長けているが、三民族の生産物は主に地元民ではないギリヤークにわたっている。オロクの狩猟はたしかに最も生産的である。なぜなら、彼らは冬中を狩猟に費やしているからだ。しかし、彼ら自身の生活様式と一般的にツングースに特徴的な屈託のなさのおかげで、彼らはしばしば、あるいは必要に迫られて、ティミ川やその他のサハリンの地域に定住し商業化したギリヤークに自身が得たものの大部分を安く売る傾向がある。オロクの移動性の高い生活は、彼らの食べ物、余暇の手段、犬の飼育をほぼ絶え間なく不足しがちにする。サハリン・ギリヤークはこれをうまく利用し、高値でこれら、あるいは地元の在庫品やアムール・ギリヤークから前もって得た品物を供給している。加えて、彼らはオロクに貸し付けることを拒まない。それはもちろん彼ら自身に有利な条件をつけることができ、彼ら自身の手利益が渡る。彼らはアイヌから同様の利益を引き出している。これら後者〔アイヌ〕は、喜んでいかなる場合も、ごく僅かな量の酒や米と交換して、あるいは全くタダで借金のかたのように生産物をもっていってしまう和人に対してではなく、サハリン・ギリヤークに対して自身が得たものを安く売る。したがって、サハリン・ギリヤークは、大陸の同胞と同様の企業心を持っていないが、それにもかかわらず民族固有の商業精神と利己主義を十分に証明している。前述の方法で獲得した動物の毛皮をアムール・ギリヤークに売りながら、彼らは同胞に中国人とより広範な交易をする手段を供給し、それにより自身の富を増やす。とはいえ、アムール・ギリヤークは、自身の同胞を通じてのみサハリンの商品を購入するわけではない。彼らは、必要があればティミの流域を通過し、オロクやアイヌと直接交渉することもある。最終的に、彼らはさらなる動物の毛皮を和人から得る。しかし、このことについては、アムール

ル・ギリヤークと中国人との交易関係が日本との交易を可能にしているという観点から詳述したい。

【中国人、満洲人との関係】

オロチとゴリドの国であるアムール川下流域において、私たちが既に述べたように、中国人が時々訪れ、幾分か長期滞在する多くの場が存在している。彼ら[中国人]は国境付近の土着民との交易のための拠点を選ぶことにおいて、高い先見の明を発揮している。これは巧みな仕事であり、それはどんな労働や困難をも恐れず、ただ自分自身や自分の雇い主のためにできるだけより多くの成果を引き出すようなどんな方法を選ぶのもいとわない。しかし、土着民に対して、表面的には彼らは極めて親切で優しい。プリ村でかつてあったように、私は気が付くと、この村に滞在中の中国人3名のうちの1名が暮らしているユルタの中にいた。リマンから私を案内してきたオリチャとギリヤークたちが、そこにちょうど入ってきた。中国人は、雪を外套から払うのを手伝い、タバコの葉をそれぞれにすすめながら、彼らの周りを奔走していた。その後、自分の場所に戻り、再びそこから客人たちに座るようすすめ、火鉢の中の火のついた炭を煙管に近づけ煙草に火をつけ、それを手渡す。そして会話を始めた。中国人は、炭箱からウォッカの入った容器を取り出し、自身の客人たちの前に陶器製のおちょこを小さな机の上に並べ、そこに魅惑的な液体を満たし、そして客人たちにすすめた。中国人は、言葉を重ねていくうちに少しずつ自身の目的に徐々に近づいていく。同胞であるニカン¹¹⁾のように彼は、良い友人であるオリチャ、ゴリド、ギリヤークや、私を含め自身の聴衆者たちを徐々に信じ込ませていく。中国人というものは、それぞれの毛皮の対価として彼らに対し希望に沿った様々な織物、脱穀したキビ、ウォッカ、タバコによって支払う用意をしている。一言で言えば、中国人は彼らを手なづけており、ただ強奪や迫害をおこなう満洲人のような彼らの共通の敵ではないのである。私は後に、ウォッカを気前よくふるまう、このような話をアムール下流地方で何度も耳にすることになった。彼らは少なくともゴリドに対していつも目的を達成していた。ゴリドは満洲人の隣に住み、完全に彼らに依存しなければならず、特に彼らからの暴力や貪欲さに耐えていたのである。恨みを持っているゴリドは、苦い皮肉を込めて自身を迫害している者たちを<シンガレ>やクマネズミ[小役人]と呼び、それらはゴリドの財産と

所有物を独占し飲み込んでしまうことを暗に意味している。それとは反対に、ギリヤークは彼らの国の入口を閉じ、満洲人の役人や税の徴収人からの略奪的欲望から守られており、中国商人の甘い言葉に無関心でいられる。しかし今度は、彼らが欲に駆り立てられて、これらの商人たちがスングリで商品を卸で安く買い入れ、それらを細かくしてアムールの異民族たちに高く転売することではいかに利益を上げているのかに無関心ではいられない。ギリヤークは、彼らの利益に奉仕することを望まず、そのやり方を模倣することを好み、そして自分自身で儲けようとする。これによって、小さな儲けさえ中国商人に許さない、彼らの頑強さを幾分かは説明できるであろう。プリ村のギリヤークの居住地の境界近くにある中国交易の中心は、オリチャ、サマギール、オロクが快く訪れているが、ギリヤークの中ではチョミに住む者たちだけが訪れている。チョミはアムールから離れている事から、ここのギリヤークは主にティミ川のサハリン・ギリヤークとの交易のための手段を得ることができる。アムール・ギリヤークといえば、アムール川の自然が彼らに与えた天然の道のおかげで、河川沿岸に散らばっている略奪的な仲介者に会わずに済むことができ、そしてスングリで個人利用またはこの先の交易のための品物を直接手に入れることができる。

【商品を運ぶ道】

スングリへの交易の旅は、ギリヤークが<満洲人>に話すように、彼らの全ての希望と現実的な要求で構成されている。このために、彼らは主にクロテン、カワウソ、キツネを狩り、貴重な毛皮を購入するために近隣の民族のもとへ向かう旅に出る。スングリの中国人にとって、価値のあるほぼ唯一のものであるこれらの交易のための品物の大量の在庫を有していなければ、ギリヤークにとって不利益であるだけではなく、満洲の役人の巨大な賄賂による買収から避けられない状況で長距離の旅に出ることはとても考えられなかったであろう。しかし、この種の在庫品を用意することは、概して容易ではない。ギリヤークは普段、より経験豊富な指導者の指揮のもと数人で一緒に毛皮獣を求める旅に出る。そして、より経験豊富なギリヤークのうちの一人が自分の責任で旅に出て、一定の賃金または利益の分け前を支払って助手として何人かの若者を連れて行く。犬ぞりで冬期の道に沿ってひとりでスングリへ行くことは禁止されている。ちなみに、これ

は旅の遠さによっても妨げられている。ここでのギリヤークのたどる道は、その時間の長さは言うまでもなく、彼らとその犬を友好的にもてなす傾向にあるオリチャ以外に、常に友好的にもてなすとは限らないゴリドの地域にまで及ぶからだ。旅行者は、ウスリとスングリの間で彼らの犬が容易に疲れ果て死んでしまうような荒野を旅する。しかし、最も有利な条件下でも、一人の商人は一度に極端に少ない商品しか運べないため、彼にとってその道を行くことは割に合わないだろう。そのような旅のための最善かつ唯一の便利な方法は、アムール川とスングリを舟で上ることである。しかし、ここでも舟を漕ぐために数人の手助けなしに済ますことはできないため、毛皮商品や食料品を多く積んでいない場合でも、状況に応じて、舟の櫂をこいだり、速い流れに逆らって綱で引っ張ったりする。したがって、この旅は普段、大規模ではないにしても経験豊富な指導者を先頭に常によく組織された集団で行われる。

【スングリでの交易】

スングリへのギリヤークの旅の最終的な目標は、サン・シンの街、あるいはアムールの異民族がイチャ・ホトン¹²⁾と呼んでいるスングリのフルハ〔地名〕あるいはムチャン・ホ〔地名〕の河口付近である。満洲・中国政府は、彼らがそれ以上国に入ることを許可していない。また、彼らは、他の全てのアムール川下流域の異民族と同様に、スングリの合流地点の河口より上のアムール川、いわゆるサハリ川へのアクセスも禁止されている。ジャンジュ〔地名〕では、これらの川の合流地点付近に満洲の役人の宿営地があり、禁止事項を厳守することが義務付けられている。したがって、ここは最西端と最南端の境界であり、それを超えると、ギリヤークとアムール・スングリ地域の直接の交流は途絶える。「キルク・ホトン」街と「スングドゥイ・ホトン」(ニングタ?) 街はスングリ沿いに位置し、イチャ・ホトンの上流、ギリヤークが「ウラ」(満洲語、ツングース語の方言で単に「川」という意味) と呼ぶ前述の支流に位置する。また、同様に<大>都市の<アイホ>(アイグン) はサハリ川にあり、アムールとスングリの中国人や、おそらく部分的にはブルカンにいるツングースやヤクートの話から、伝聞によってのみギリヤークの間でよく知られている。もし満洲・中国政府がギリヤークに他の全ての外国人の立ち入りが禁止されているスングリに入ることを許可した場合、

これは政府が彼らを自分たちの支配下にある民族と見なしていることを示している。しかし、満洲・中国政府はギリヤーク固有の地域に対して何の権利も主張せず、軍のスパイも送ることはなく、徴税人も派遣していない。ゆえに、ギリヤークは自身が独立していると考えている。満洲・中国政府のこれらの寛容さは、この場合、抵抗を避けるための詭計以上のものではないのかもしれない。ギリヤークたちの抵抗を抑え込むことは、利益よりも手間と費用がかかるだろう。しかし一方で、サン・シンに交易に来るギリヤークに高い税金を課すことで、彼ら自身は報われている。そして、もし儲けに対する希望が灰のように飛び散らず、旅を無益に終らせたくなければ、ギリヤークは高い税金を払うことに従わなければならない。加えて、満洲・中国人に直接依存しているゴリドや他の民族らが遭わされているのと同様の待遇に耐えなければならない。ギリヤークは、それと同様に敬意を持って満洲・中国人に振舞う必要がある。満洲・中国人に要求や挨拶のために近づく際、彼らの証言によると、満洲・中国人の前にひざをついて頭を垂れる。これはギリヤークの規則や習慣には全くない行為である。そのため、サン・シンに現れるギリヤークは、満洲・中国政府との関係において、完全に服従しているように装っている。そして、政府はこれと貢納の形で賄賂を徴収することに満足している。それらは、現地の役人のポケットに非常に静かに留まっていると考えられなければならない。

毎年スングリに来るアムール川下流域の異民族に対する満洲の役人や中国商人の扱いは、極めて残酷で無礼で屈辱的なものである。謙虚で忍耐強いゴリドに対しては最も悪い。1866年と1872年にスングリを沿ってペトゥネー〔ボドゥネー(伯都訥)]まで登ったヒルコフスキー〔人名)(ヒルコフスキー(著名なロシア人地理学者。общ., Т. II, 1866, отд. II, 227頁. Petermann's Geograph. Mittheil. (1868) の抜粋を参照, p.345) [原文292頁 註1]) とバラバシュ〔人名)(Y. バラバシュ『スングリ語辞典』1872 (Воени.Сборн., 1874, №3, 141頁) [原文292頁 註2]) によると、アムールから来るすべての商人は、まずサン・シンへ行くための通行証と自由交易のための証明書を用意する必要がある。そして、これらはいずれもスス〔蘇蘇) という満洲の役人が駐在している村で提示される。ゴリドたちはこれらの証明書を手に入れるために、非常に多くの魚の鰭やチョウザメ類の軟骨を取り立てられた。サ

ン・シンでは、中国商人のための新しい税金と貢物¹³⁾が彼らに期待されていた。各々の交易商から高品質のクロテンの毛皮を収賄し、この目的のために任命された役人は全ての商品を容赦なく選ぶ。所有者たちは、全ての時間おとなしく両膝をつき、しばしばこれは1時間かそれ以上続く場合がある。当然のことながら、これは1匹のクロテンだけでは止まらない。そしてこれは沈黙を引き出す。さもないと、少しでも逆らえば竹製の棒で容赦なく打たれてしまう。役人たちの後は、中国商人の出番が到来する。しかし、これは暴力だけではなくウォッカの誘惑に屈するものもある。ツングースはウォッカに抗えないのである。そして中国商人はさらにゴリドを追跡し、最小限の債務として彼らの父や祖父の時代につくったと思われるような借金の返済として大量のクロテンの毛皮を要求する。ゴリドは刑罰への恐怖ゆえ、商人と大部分の行動を共にする役人が彼らの交易権を剥奪することのないように、ただ反論せずに待つのである。

ギリヤークは、毛皮製品に加え自身の生産品からチョウザメ類の脊柱、軟骨、膠もサン・シンで取引している。彼らは、これらすべてを一部は自分たちのため、一部は近隣民族との貿易のために交換し、必要な品物を得る。このように穀物や野菜、特に熊祭¹⁴⁾を構成するものの一つである小麦、大麦、きび、白豆、黄豆、ウォッカ、タバコがある。また関連器具では、陶器のカップ、テーブル、いたる所に普及している銅製のパイプがある。中国製の織物では、男女ともに服に使用されるグレーやブルーの木綿、黒い絹とベルベット、斑模様の絹、多彩な絹糸、裁縫用の針、ボタンなどがある。装飾品では、銀のイヤリング、指輪、プレスレット、ビーズ飾り、女性のワンピース用の銅や真鍮製の飾りなどがある。最後に、家庭用品では大小の鍋などがある。しかし、サン・シンで取引される大量の商品は、以前ギリヤークがアムール川を遡りスガリに沿って困難な航行を果たした小型舟で損傷なく運搬するには、大きすぎて扱いにくかった。そこで、彼らはゴリドが製作したより大きな満洲船を入手し、それに乗って容易かつ迅速に川の流れて下流に戻ったのである。このような場合、ギリヤークは通常、流れが最も速い川の中央の位置を保ち続け、常駐または一時的に停泊している満洲の役人や中国商人からの攻撃、新たな強盗を避けている。彼らはそこかしこにおいて、ギリヤークを待ち伏せている。ギリヤークによっ

てサン・シンで購入された満洲船は、そこから戻る際も彼らのために働き続けている。さらに彼らはシザム(和人)への更なる航海にとりかかっており、我々はこれからその交易を検討することにする。

【和人との交易—蝦夷錦など】

ギリヤークがサン・シンの中国人と交易する前述のすべての品物の中で、第一に占めるのは、龍やその他の図像を描いた銀糸や金糸が一面に織り込まれた色とりどりの絹織物である。これらの布の一部は一反単位で販売され、一部はすでに幅広の袖を備えたゆったりとしたガウンの形で販売される。アムール地域外での主な販売先は和人である。したがって、中国製の織物はギリヤークと和人の間の直接交易関係の手段となっている。しかし、この交易は日本国内ではなく、サハリンの和人移住地で行われている。このことは、和人から我々に伝わったこの島に関する最も古い証言の中ですでに言及されている。1652年以前にもエッソ¹⁵⁾を訪れた日本語通訳カンネモンは、この島で<クラト>または<クラフト>(サハリン)から得られる特別な種類の絹織物についてすでに言及しており、その結果、彼はそれらを<クラフトリ>と名付けた(Iesoki, ou Descr. de l'île de Jesso, traduit du japonais par feu M. Titsingh. (Annales des Voyages, publ. par Malte-Brun, T. XXIV, Paris 1814, 162, 164頁)[原文293頁 註1])。この主題に関するさらに明確な情報は、1785年か86年に江戸で出版されたリンシフェ¹⁶⁾の著作<San kokf tsou ran to sets [三国通覧図説]>にある(Klaproth, San kokf tsou ran to sets, ou Aperçu général des trois royaumes, Paris. 1832, 190頁。また、Ritter, Asien, Bd. III, 487頁も参照のこと[原文294頁 註1])。エッソ(マツマイ)の住民は、自国の製品をクラフト[サハリン]にある<マンチュ>に送り、そこで淡い青色のビーズやワシの羽根、タバコを吸うためのパイプ、龍柄の絹織物、さまざまな色の木綿や亜麻布と交換していると述べられている。ここでそれは疑いなくサハリンにおける満洲・中国人、ギリヤーク、オリチャの交易を指しており、一部は輸入品、主に中国製品、一部はアムール地域の地元製品(例えばワシの尾羽など)である。彼らは地元のアイヌと和人と交易を行っており、先述したアムール川下流域の二つの民族と一部のゴリドが今でも交易を行っている。確かに、言及された証言には彼らの名前は記載されていないが、当時の和人とアムール川下流域の異民族との面

識がほとんどなかったことを考えると、このようなことは期待できなかっただろう。むしろ、和人が<マンチュ>という一般名で呼んだのは、中国と満洲の商品を交易するためにそこに来たすべてのアムールの異民族を意味していたと考えなければならない。後世のロシア人の記述でも、サハリンでは和人と交易に来たオリチャやギリヤークもしばしば<満洲人>と呼ばれることがあったのだ(例えば、ルダノフスキー(チフメネフ『ロシア・アメリカ会社の成立と現在に至るまでの事業に関する歴史的考察』第二章、1863年、127頁)、およびブッセ(『サハリン島と探検、1853年』サンクトペテルブルク、1872年、62,72,85頁など)を参照のこと[原文294頁 註2])。けれども後者の、ロシア人が一般に満洲の名で呼んでいる中国商人も、現在はサハリンを訪れていない。しかし、この交易に関するロシアの最初の情報は、日本のリンシフェ[人名]の証言とはほぼ同時期に遡る。遅くとも1792年にアダム・ラクスマンはエッソの和人から<カラブ>(クラフト、サハリン)にビーズや織物を持ち込み、そこで動物、クロテン、キツネの毛皮と交換した<サンダン・アイヌ>の話聞いていた(ポロンスキー『クリル』(Зап. Имп. Русск. Геогр. / Общ., по отд. Этногр., Т. IV, 493, 541頁を参照のこと[原文294頁 註3])。彼[ラクスマン]が<サンダン出身の人々>という名前で行ったのは、確かに朝鮮人¹⁷⁾を意味していた。しかし、前述したように、和人とアイヌは一般にアムール川下流域に<サンタン>という名前を適用しているので、間違いなく交易目的でサハリンを訪れるギリヤーク、オリチャ、ゴリドのことを言っているのである。

【シラヌシに辿り着くまでの道】

ギリヤークと和人の交易の中心は、和人の主な居住地である島の南西端のシラヌシにある。つまり、ギリヤークが和人だけでなくアイヌとも交易するために<シザム>を目指す旅の最終目的はここにある。旅は夏にも冬にも、舟と櫓の両方で行われる。海路の場合、ギリヤークはスングリで購入した満洲船か、前述した自分たちの舟を使用する。自分たちの舟の側面には、大きな波から守るために、両側に追加の板を取り付けている。しかし、ギリヤーク独自の舟には竜骨がなく、舟の構造を考慮して、ひらけた外海を慎重に避けている。おだやかな天気を選んでマミア・リンソ¹⁸⁾海峡を越えると、彼らはサハリンの西海岸に到達する。その海峡の最も狭い地点は、ラザレフ岬(ギリヤーク語で

ピリヤンクフィ、すなわち大きな岬、オリチャ語ではワズフンという)とポゴビ岬の間で、幅わずか4海里である。そして、ギリヤークは常に西海岸にできるだけ近づこうと努力する。しかし、この海岸は特にドゥイから南に下ってピリャヴォ[地名]までは険しく岩が多いため危険も多い。危険を避けるため、ここでもギリヤークは穏やかな天候が微風だけを利用して航海する。このような状態での航海がとても長くつづいたため、特に舟に負担をかけないように、わずかな食料しか持っていらず、航海中の食料はもっぱら例外なく網漁に頼っている(シュミット 前掲 54頁[原文295頁 註1])。しかし条件がよければ、ドゥイからクシュナイ[地名]までの舟旅の最悪の場所を、しばしば4~5日で行くことができる。しかし、この岩だらけの海岸沿いを犬櫓でシザムへ向かう冬の旅は、さらに困難である。その海は常に凍るとは限らず、凍った場合も波の圧力に耐えられないことが多い。強風が氷を砕き、横に吹き飛ばすのだ。その後、旅行者たちは陸路で旅を続けるが、サハリンのこの地域は山が多いため、長い迂回を余儀なくされる。ドゥイ近くのアルカイ¹⁹⁾[地名]で海辺を離れ、低い峠を越えてティミ川の源流に向かう。ここからプリまたはポロナイ[地名]に向かい、下流に下ってテルペニヤ湾に達すると、ギリヤーク、ウイльта、アイヌのサハリンの3民族が暮らす集落にたどり着く。彼らは島の東岸に沿ってマヌエ[地名]まで進み、サハリンの最も狭い部分にある低くて便利な峠を通して、クシュナイで再び西岸に渡り、最終的にシラヌシに到達する(シュミット前掲 110頁[原文295頁 註2])。

【サハリン・アイヌとの交易】

ギリヤークがシザムに渡航する際には、すでに述べたように、彼らだけと交易するのではなく、アイヌとも交易をする。品物は同じ動物の毛皮であり、ギリヤークはその代価として同じ木綿布、タバコ、パイプ、ビーズ、その他満洲・中国産の品物を支払う。交易はサハリンの東西両海岸で行われており、ギリヤークがアイヌと出会うところならどこでも行われている。しかし、その中心はクシュナイ近郊のナヨロ[地名]で、アイヌは遠くの、例えばアニワ湾などからも集まってくる(ブッセ84頁、シュミット前掲92頁[原文295頁 註3])。和人はこの交易を好ましく思っておらず、ありとあらゆる方法で妨げようとしている。和人はアイヌの毛皮製品のすべてを手に入れたがっているが、アイ

ヌと取引する際は、貪欲に彼らを抑圧する。脅しや恐喝によって、和人は異民族に望みの商品を非常に安く手放させ、あるいは架空の借金を口実に無料でとりあげさえする(ブッセ71頁[原文295頁 註4])。そのため、アイヌは可能な限り和人との交易を避け、和人から動物の毛皮の在庫を隠し、サハリンのギリヤーク、さらに望むらくはアムール・ギリヤークやオリチャに売ろうとする。この両者ともクロテンの毛皮の代価として、彼らの厚意にもよるが、中国製の本綿布2サージェンから3サージェン[1サージェンは2.133m]を支払う。カワウソの毛皮の場合は、1/4アルシン[1アルシンは0.711m]、1ピヤド[約18cm]ごとに同額を支払う。つまり、カワウソの毛皮の長さが5/4アルシンであれば、なめしの際に皮がひっぱられるのは避けられないが、前述の10サージェン分を支払うことになる(ブッセ 前掲.84頁[原文296頁 註1])。ギリヤークがここで設定した毛皮製品の価格は、彼らの土地での価格とはほぼ同じである。

【ギリヤークと和人の交易の様子】

シラヌシに到着すると、ギリヤーク商人たちはまず、シザム[和人]により特別に用意された儀式を受ける。彼らはそれぞれ、従属の印として和人の役人の手により背中を棒で2、3回叩かれる。その後、商品は彼らから取り上げられ、部外者が立ち入ることのできない指定された建物に検査のために持って行かれる(ルダノフスキーによる。チフメネフ『ロシア・アメリカ会社の成立と現在に至るまでの事業に関する歴史的考察』、127頁も参照のこと。この著作では、シラヌシという名前は<シラクーシ>と間違っって発音されている[原文296頁 註2])。品物の中の良いものは、もちろん持ち主に返されないことを想定しなければならない。しかし、和人は訪れたギリヤークやオリチャからアイヌに行うように大胆に奪おうとは思わない。あまりに乱暴な暴力は、彼らが国へ訪れる気をなくし、その結果、彼らの熱烈な欲望の対象である輸入品を奪ってしまうことを恐れているのだ。ギリヤークとの交易は、和人にとって大きな利益となる。和人は、サハリンやエッソのアイヌから強奪して手に入れた動物の毛皮(クロテン、キツネ、カワウソ)を大量に、しかもほとんど無料で得ている。良く知られている和人の毛皮嫌いのために、日本では毛皮製品はまったく大切にされていない。ギリヤークは日本の取っ手付き大鍋が好きで、彼らにも少なからぬ利益をもたらしている。そ

して、米、タバコ、酒、陶磁器、木製の漆器は、和人とギリヤークとの間の有益な交易の対象である。そしてギリヤークの側では、赤や青の色とりどりの絹織物や鷺の尾を和人に提供する。和人がこれらの品物に支払う高値は、ギリヤークのこれらの品目に対する傾倒を十分に示している。クリ村のギリヤークのボズヴェインによれば、和人は幅1アルシン、長さ7サージェンの絹織物1枚に、カワウソの毛皮5枚と、同じ枚数のクロテンやキツネの毛皮を支払う。オオワシ²⁰⁾の尾にはカワウソの毛皮12枚を、それよりもはるかに価値の低いオジロワシ²¹⁾の尾には米を望んだ分だけ与えるという。当時、アヤンにあったニコラエフスクとムラヴィヨフ哨所のロシア・アメリカ会社の事務所と倉庫の管理責任者であったフルギエリム[人名]の証言によれば、アムール川下流域からシラヌシに毎年やってくる商人たちがシラヌシで購入する動物の毛皮の総量は、カワウソの毛皮が2400枚、クロテンの毛皮が1300枚、キツネの毛皮が640枚であった(チフメネフ『ロシア・アメリカ会社の成立と現在に至るまでの事業に関する歴史的考察』128頁[原文297頁 註1])。ギリヤークやオリチャがシザム[和人]から得て故郷に持ち帰った毛皮は、アムールや主にスングリの中国人との交易の対象として役立っている。このようにして、彼らはアムール川下流域の一般的な交易活動の活性化に大きく貢献した。

サハリンのシザム[和人]のもとでのギリヤークとオリチャの滞在は、時にかなり長期に及ぶ。夏に到着した後、その多くは犬に乗ってクシュナイ、マヌエの冬の道を通り、ポロナイ、ティミ川の流れて沿って故郷へ戻る。また、シザムで越冬した後、次の春か夏の訪れとともに帰路につき、再び舟でサハリン西岸を航行していく者もいる。途中、彼らは可能な限りアイヌとの交易を続ける。シュミット(Histor. Ber. etc., l. c., 54頁[原文297頁 註2])によれば、特に仔グマを捕らえようと努力し、それを家で育てる。

シラヌシは、和人と交易するアムール川下流域の商人がサハリンで最後に立ち入る場所である。ちなみに、彼らはアニワ湾のクシュンコタンへの立ち入りは禁じられている。西にある中国のサン・シンがギリヤークにとって直覚的になじみ深い世界の南方への極限だとすれば、ここ東の日本では、その極限はシラヌシである。現在のシザムの国[日本]は、サハリン(ler - mi)から<小さな海>(Mach - kerhk)で隔てられた小さな土地であるにすぎない。その

後、アムール地方がロシアに占領されると、和人はシラヌシとサハリン西海岸で2番目に大きな和人数集落であるエンドウゴモ²²⁾〔地名〕への商人の立ち入りを許可しなくなった。同時に、和人は島の北部にまで植民地を拡大しようとした。ロシアの勢力拡大に歯止めをかけ、アイヌに対する支配権を保持し、従来通りアイヌを抑圧し略奪することを望んだのだ。すでに1859年には、ギリヤーク商人のシラヌシへの立ち入りが禁止され、翌年には交易のために樺太にきたオリチャもエンドウゴモに入ることが許されなかった²³⁾。彼らの一部はクスナイに留まり、他の者は島の東岸のタライカに移動した(ブルイルキン『サハリンからの手紙』(Зап. Сиб. Отд. Имп. Русск. Геогр. Общ., Кн. VII, 22, 26頁)およびシュミット 前掲107-108頁〔原文297頁 註3〕)。この禁止令はテバフ出身のギリヤークのユージン〔人名〕の耳にも達したが、彼はそれまで何度もシラヌシを訪れ、そこでよく知られていた。アイヌの母から学んだアイヌ語の知識のおかげで、通訳として使われたことも一度や二度ではなかった。しかし、こうしたことやロシアに占領された後のアムール地方の交易に起こったその後の変化については、この評論の範囲外である。

【小括】

つまり、ギリヤークは高度に商業化された民族であり、交易の利益にかなり熱心であることがわかる。狩猟が苦手な彼らは、自分たちの狩猟だけでは2つの文化的民族〔中国人と和人〕と大規模な交易を行うための手段を得ることができない。しかし、彼らの活動におけるこの欠陥は、より巧みな猟師である隣人との交易における彼らの不断的努力と一貫性によって十分に埋められる。原始的な移動方法にもかかわらず、十分な量の物資を確保した彼らは、スングリ沿岸やサハリンの南部、つまり＜満洲＞や＜シザム＞への長旅を行う。このように、ある国の産物と他の国の産物の交換を促進することで、ギリヤークは東アジアの2つの主要な文化的民族、つまり中国人と和人の間の交易仲介者にもなっているのだ。このようなギリヤークの交易活動の側面は、否応なしにもうひとつのパレオアジア人であるチュクチと比較されることになる。チュクチも狩猟は苦手だが、交易には長けており、北のツンドラを縦に横断し、ベーリング海峡を渡り、ユーコパ〔地名〕の海岸で捕られた動物の毛皮をエスキモーから買う。その見返りとして、彼らはロシア・シベリア産の

商品を渡し、アニューイ〔地名〕に戻ると、エスキモーから得た毛皮製品で代金を支払って、再びロシア・シベリア産の商品を買い占める。こうして極北の彼らは、ヨーロッパ、アジア、アメリカの交易仲介者となっている(チュクチの交易については、マチュシュキンの極めて詳細な報告によっている(『ランゲル旅行記』ロシア語版、第1巻331頁以降)。また、デイトマラ(Bull. de la cl. hist-philol. de l'Acad. Imp. des sc. de St.-Petersb., T. XIII, 1856, 129頁以降や Mel. russes, T. III, 39頁以降)などもある〔原文298頁 註1〕)。どのシベリアの異民族も、交易活動に関する限り上記2つのパレオアジア系民族と比較することはできない。たしかにオリチャも交易において大きな商業精神を有しているが、これから我々がみるように、彼らの発展はもっぱらギリヤークの影響下で起こったものである。

(オリチャの話につづく)

訳注

- 1) 原文は「イノローツィ (инородцы)」。本稿では、ロシア史における歴史用語として「イノローツィ」を「異民族」と訳す。「イノローツィ」は、1822年の「異民族統治規約」において法令用語として使用されて以来、19世紀を通じてシベリア及びその周辺の非スラヴ系の異民族全般を指し示す用語として広範に使用されてきた(吉田2018:68)。2024年現在、ロシアでは人口5万人以下の先住民族を表す法律用語として「先住少数民族」という用語が用いられ、47民族が政府の公認リストにあげられている(Правительство России 1999, 2000)。「イノローツィ (異民族)」はこの「先住少数民族」という現在の法的枠組みを大きく超え、タタール系、モンゴル系、テュルク系などの諸民族をも包摂した範疇の用語である(吉田2018:68)。
- 2) 原文は「ヤボンツィ (японцы)」。シュレンクはギリヤーク語で日本の土地や民族としての日本人を表す用語として「シザム (Сизамъ)」を用いている。また、「ヤボーニヤ (япония)」や「ヤボンツィ (японцы)」などの用語も併用している。本稿では、原文で「シザム」と記載されたものは原則「シザム」と訳出した。また文脈に応じ、国籍としての日本人ではなく、民族としての日本人を指す際は「和人」とし、地理的な場所を指す場合は「日本」とした。
- 3) 「トゥゼムツィ (туземцы)」もロシア史における歴史用語であり、本稿では「土着民」(文脈に応じて「地元民」)と訳した。「トゥゼムツィ (туземцы)」は「ゼム (зем)」(土地)という語根をもち、「彼の地の住民」のようなという意味を有している(Соколовский 1998:58, 吉田2018:69)。
- 4) 原文は「イノゼムツィ (иноземцы)」。文脈的に、ギリヤークとは異なる(ино-)土地(зем-)からやってきた人々という意味で「外国人」としてのロシア人を指すと考えられる。
- 5) 原文は Phoca nummularia。
- 6) 原文は Phoca barbata。
- 7) いわゆる蝦夷鯨のことか。
- 8) 原文はベルーガ (белуга)。アムール川に生息する大型のチョウザメを指す。現在はカルーガと呼ばれる。
- 9) 間宮林蔵『北蝦夷図説』に満洲製の鎧の記録がある。
- 10) エトロフ島の番人小頭であった中川五郎治はこの交易を目撃し、その様子を「五郎治申上荒増」に記している。五郎治は1807(文化4)年にロシアのフボストフらのエトロフ島襲撃によりシベリアに連行され、1812年まで抑留生活をした。『五郎治申上荒増』は五郎治のシベリア生

活に関する記録で、秋月(1994)や左近(1999)らにより翻刻、現代語訳等が行われた。なお、五郎治はロシア語の知識を活かし、種痘に関する書籍(『通花秘訣』)を日本語で初めて記した人物でもある。

- 11) 中国人をゴリドやギリヤークと呼ぶときのスラング。
- 12) シュレンクの聞き間違いにより区別して記されているが、サン・シンと同じ場所を指す。イチ・ホトンは新しい街という意味。イラン・ハラ、サン・シン、イチ・ホトンは全て同じ場所を指す。
- 13) 原文は「アルバン(албань)」。満州語で貢物の意味。
- 14) 原文は「принадлежности медвежьих праздничеств(クマの・祭りの・一部(付属品))」。国立アイヌ民族博物館の基本展示室では「クマの霊送り儀礼」としているが、本稿ではシュレンクの書き方に倣い、あえて「熊祭」と訳した。
- 15) 現在の北海道のこと。
- 16) 江戸時代の経世家である林子平(1738-1793)のこと。
- 17) 原文は「コレイツィ(корейцы)」。
- 18) 江戸時代の探検家である間宮林蔵(1780-1844)のこと。サハリン、および海峡を渡り黒竜江周辺を調査した。サハリンが大陸とはつながっていない離島であることを明らかにし、この海峡を「間宮海峡」とした。シュレンクは、シーボルトの著作の影響でこの名称を用いている可能性がある。
- 19) アルコエのことか。
- 20) 原文はHaliaeetus pelagicus。
- 21) 原文はHaliaeetus albicilla。
- 22) エンルモコマフのことか。
- 23) シュレンクの間違いか。サンタン交易の記録は1867年まであり、政府が立入を禁止したのは1868年である。

参考文献

秋月俊幸(翻刻・解説)

1994 『北方史料集成 第五巻』北海道出版企画センター

左近毅

1999 「和人のシベリア認識：『五郎治申上荒増』をめぐって」『人文研究 大阪市立大学文学部 紀要』51巻7号、47-94頁

佐々木史郎

1996『北方から来た交易民—絹と毛皮とサンタン人』東京：日本放送出版協会

ブッセ、ニコライ(著)、秋月俊幸(訳)

2003『サハリン島占領日記 1853—54 ロシア人の見た和人とアイヌ』平凡社

吉田睦

2018「シベリア史における先住民の成立—先住民概念と用語について」、永山ゆかり、吉田睦(編)『アジアとしてのシベリア ロシアの中のシベリア先住民世界』、66-81頁、勉誠出版。

Shrenk, L. I.

1899 Ob inorodtsakh Amurskogo kraia. Tom 2, Imperatorskaya Akademiya Nauk, Sankt-Peterburg

Шренк, Л. И.

1899 «Об Инородцах Амурского Края», Том 2. Санктпетербург

Соколовский С. В.

1998 «Образы «Других»: историческая топология мышления о коренных народов России». В кн.: Этнометодология Вып. 5: Сборник статей. М.: стр. 57-84.

Правительство России

1999 О гарантиях прав коренных малочисленных народов Российской Федерации. Федеральный закон от 30 апреля 1999 года. № 82-ФЗ (с изменениями и дополнениями на 13 июля 2020 года) .

<http://iv2.garant.ru/document?id=80406&byPara=1&sub=9576>

2000 О Едином перечне коренных малочисленных народов Российской Федерации. Постановление Правительства РФ от 24 марта 2000 года. № 255 (с изменениями на 26 мая 2020

года) .

<http://gov.garant.ru/document?id=81870&byPara=1&sub=10393>

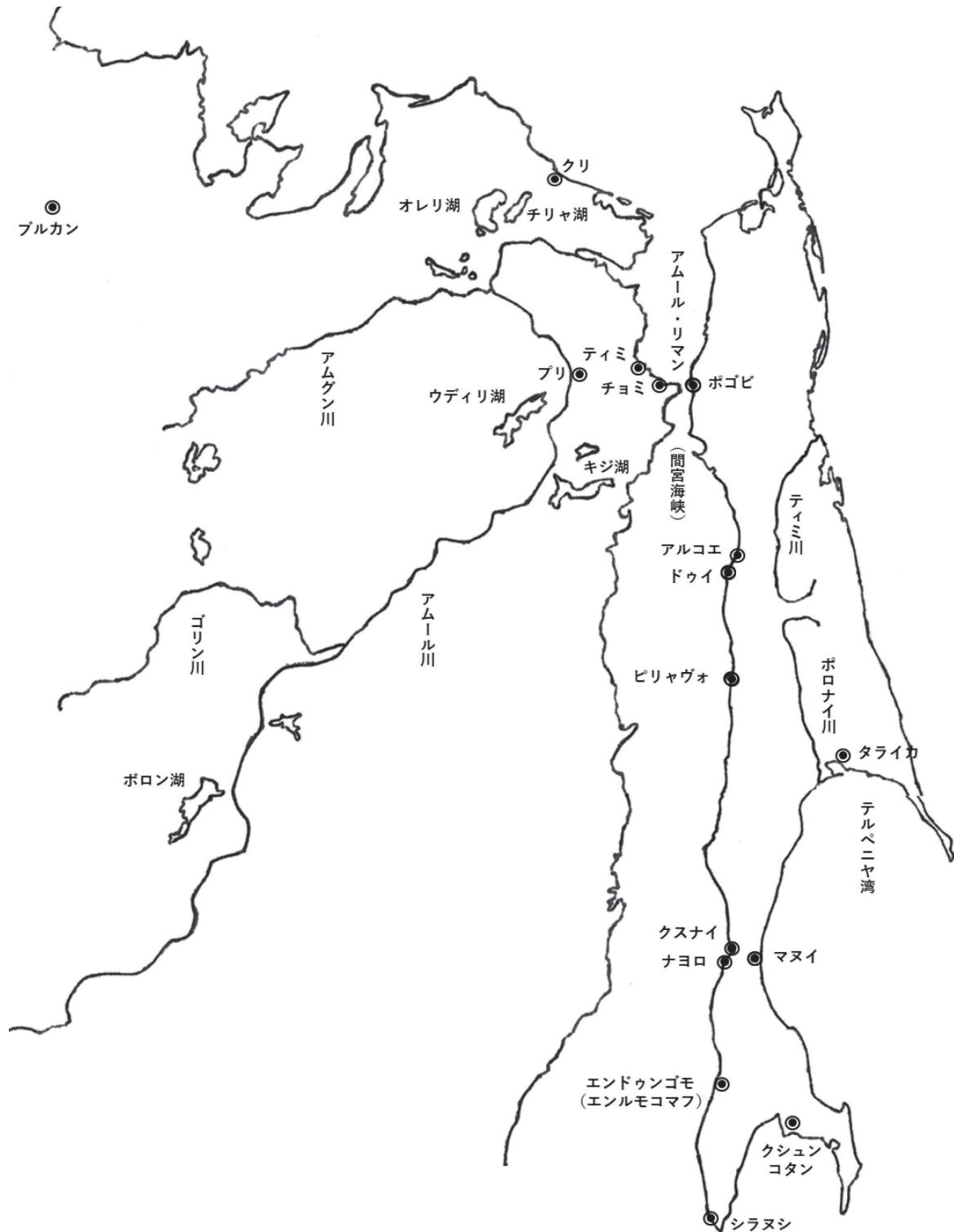


図1 19世紀中葉のアムール川下流域およびサハリン周辺の地図